

桜蔭俳話会 通信句会(第一二二回 平成二六年冬)

高得点句 自句自解

八点

⑤ ちりちりと脛に噛みつく寒の風呂

小川名梅乃

この冬の寒さは、稀にみる厳冬でした。常に病と向かい合いの日々にとっては、身に堪える程のものでした。時には朝から滅入ることもあります。今日一日を何とか過ごせたことを、衷心より感謝しながら一番風呂に入浴することがあります。寒の寒さで心と手足と凍えた体がちりちりとする感覚がありました。入浴すると間もなく五体に温もりを感じて幸せを噛み締めました。この一句は、そのまま素直に、口から詩となつて流れ出たものかと思ひます。

七点

ジーンズの凍てしままなり軒の下

小川名梅乃

凍てしままなり軒の下・・・何の不思議はなけれども、この風情に強く惹かれました。早朝、久しぶりに散歩に出た先の光景です。前の晩から干したものだらうが、軒の下でジーンズが凍てしままなり、吊るさがつていました。その風情をみて、直感的に断定して謳い得ることができました。真新しい感覚で対象を掴み、相応しい言葉で自分の句を表現したいという切なる思いで一句を成しました。計らずも、この日は、紅梅を員に行く先で、空を見上げれば晴天の中での思いがけない軒の下を見ました。老若男女の別なく愛用されるようになったジーンズ。それを着用する人までもが想像させられたひとときでした。

癒ゆる目に眩しかりけり寒椿

藤崎安紀子

左目が後発白内障ですっかり見えなくなつてしまい、レーザー手術をしました。手術を終えた途端、バツと光がさしみびつくりする位、視野が広がりました。病院を出てまっさきに目に飛び込んできた寒椿の鮮やかな紅色がすごく印象的でした。

六点

① 透きとほる命一つや寒卵

増田 守

鶏卵に光をあてると、有精卵では生育の証に血管等が透けて見える。命そのものである。普段食用にしているは無精卵であるが、人間は他の動植物を糧として生を存えている。別の言い方をすれば、摂食を介して命の継承が行われている。

① 雪の野や見えぬものある幸せも

藤崎安紀子

見えなかつた目を手術したら、汚れやしわや見えなくてもよいものまではずり見えるようになりました。見えぬ時は呑気で安らかにいられたものを、見えるばかりに気がかりになり、心が乱されてしまう事もあるのだなあと思います。この句は読みとり方によっては雪害で大変な方々や目の不自由な方々に失礼になってしまうかとも思い投句を迷いました。また、「下五」の「幸せも」は、もつとよい言葉がないかと、今でも考えています。

五点

② 白障子明りにひとり封書切る

稲葉 幸

これは、待ちに待った連絡でしたが、家族に内緒のため落ちて着いて机に向かうことなく、急ぎ封を切り、そそくさと仕舞い込みました。

② 立冬やコップに満たす富士の水

恩田 才美

さあ、いよいよ冬に入る朝。冬將軍の威に負けず、いきいきと立ち向かう心の準備を詠んだものです。尾瀬の水でもアルプスの天然水でもありません。その胎内に豊かに凍とした力を湛えている富士の水を全身に頂いてこそなのです。

① そはかと若やぐ十指三が日

恩田 才美

屠蘇をいただく、年玉を差し出す、エプロンをはずす、祝ひ重、祝ひ箸、ガラス越しの陽光、いくつになっても子供の頃の無垢な気持ちで迎え、祝ぐお正月三が日である。

① 山眠る火の入れられし登り窯

増田 守

去年、九州の窯元巡りをした。谷間に点在する工房では、陶土が丹念に練られ、熟達の手によって巧みな形が次々に生まれていた。工房作品は魅力的であつたが、簡単に購入できる値段のものではない。それでも、記念の一つにと、指先に良く馴染む形の湯呑を求めた。一期一会のように出会つたこの湯呑は、毎日の食卓に並ぶ。

樽並ぶつけもの里初しぐれ

辻 幸子

京都三千院のある大原にはつけ物工場があり、庭にからぼの樽が並んでいました。参道にある土産物店にはつけ物がたくさん入つた樽が並んでいます。十一月初旬のそんな光景を詠みました。